

# まちづくりビジョン策定委員会（第7回）会議録

■ 日 時：平成26年4月10日（木）午後2時30分～午後5時20分

■ 場 所：みなかみ町観光センター 2階 第2会議室

■ 出席者：

①まちづくりビジョン策定委員会（10／13名）

小林 洋、河合 生博、小野 章一、鈴木 和雄、津久井 功、木村 孝弘  
持谷 美奈子、金子 崇範、本多 圭仁、鬼頭 春二

②アドバイザー（1／1名）

平松 庚三

③事務局（3／3名）

まちづくり交流課長 宮崎 育雄、商工振興GL 小池 俊弘、主査 大川 志向

■ 配布資料

資料1 まちづくりビジョンのイメージ

■ 会議内容

---

## 1 開会

## 2 議事

平松 5月下旬に委員会の中間報告会を予定しているが、ここでの報告は、10年後の町の姿を、ユネスコエコパークの認定を戦略の核とした日本一のエコの町にしていくという方向で検討しているという内容でよろしいか。そうすることで、人口や雇用を増やしていきたい。

鈴木 ユネスコエコパークをベースにビジョンを策定するのでよいのではないか。認定は手段であるが、認定されることでみなかみ町の価値は上がっていく。

平松 中間報告会までにビジョンの柱は決めていきたい。中間報告会の内容について、反対の方はいるか。

<反対の意見なし>

平松 これまでに検討された戦略をイラストにまとめてきたが、完成にはまだ遠いような気がする。特に、農林業とエコの関係、堆肥製造施設、森林整備隊組織の有料会員化、ペレットやRDFと化石燃料の経済性と熱量比較、県が経済特区に指定された重粒子線治療などについて、みなさんの意見をいただきたい。

鈴木 重粒子線を発生させる装置は群大附属病院に設置されており、すでに稼働している。がん治療といえば群馬県と売り込み、県内温泉地に宿泊して治療を受けるメディカル

ツーリズムを推進している。

平松 （資料により、これまでに検討された戦略の内容を確認）

- ・ 10年後の姿を大きな絵に描き、これを達成するための計画を戦略的に実行すれば、実現は不可能ではない。
- ・ しかし、町だけでは実現不可能であるので、外部資源の活用、協業、アライアンス、Win-Winの関係作りがキーワードとなる。

### みなかみエコタウン構想

ユネスコエコパーク認定を核としてのまちづくり、地域の活性化

世界のエコタウンMINAKAMI（みなかみをエコロジーの筑波学園都市にする。）

ワールドエコタウンパビリオン建設

世界中のエコパークの紹介、エコロジーを学ぶ、観光客、学校客誘致

エコロジー大学院大学

世界のトップエコロジー学者を招聘する大学院大学の誘致

環境省エコロジー研究所

日本最高峰のエコ研究所誘致。同時に研究所のサテライト機関としての企業、大学、ベンチャーの誘致

MINAKAMI会議

世界の首脳がエネルギー問題を話し合う「みなかみ会議」を提唱、誘致

みなかみユネスコスクール

太田市の国際スクールをモデルに小中一貫の全寮制インターナショナルスクールの誘致

以下の戦略は順不同

歩くみなかみ

「歩く」をみなかみの一つのブランドとする。上級からファミリーまでの100本のFoot Pathを整備、オリエンテーリングワールドカップ誘致から、観光資源としての歩く商品を開発整備する。エコ学習コース、りんご狩りコースなど。

エコ日本一

エコカー普及率、家庭用ソーラー発電普及率、ゴミリサイクル（RDFのビジネスモデル）、宿泊施設の充電設備の日本一

農業法人設立

ドールランド、オリブランド、農産物加工設備の動力をすべてクリーンエネルギー、再生エネルギーに。

教育

利根商の存続理由を住民の陳情レベルから国としての必須レベルへ。観光学科、エコロジー学科の新設

温泉排水利用

宿泊施設の温排水リサイクルシステム。館内リサイクル、温泉排水を利用したハウス栽培

メディカルツーリズム

重粒子線治療と協業した森林セラピー、温泉セラピーで「ラグジュアリー湯治」を提案。内外の富裕層に向けたメディカルツーリズム商品を開発する。

エコロジービジネスの開発

ペレット、堆肥、RDF製造のサイクルを経費から利益に、新ビジネスモデルの開発  
プレミアムタウン構想

団塊富裕層をターゲットとしたセカンドホーム誘致、富裕層向有料老人ホームの誘致  
スポーツタウン構想

サッカーグラウンド、野球、バスケットコートを整備、キャンプ合宿の誘致。雪合戦  
の普及啓蒙、雪合戦ワールドカップの誘致

食文化

不適格農産物を使った食品、素材の開発

平松 中間報告会の目的は、みなさんの理解を得ることではなく、一緒に考えていただき、  
知恵を貸していただくこと。これまでのところで意見をいただきたい。

津久井 エコに関する学科を卒業した学生は就職が困難である。エコに関してこれだけの  
頭脳・権威が集まるのであれば、CSRやISOの評価制度など、その知財を活用す  
ることはできないか。

平松 ワールドスタンダードとなるようなことが、みなかみから始まるとおもしろい。

■ エネルギーの地産地消について

平松 RDFやペレットの活用についてはどうか。

小野 RDFの処理にも多額の経費がかかっているが、これまでに活用された実績がない。

鈴木 RDFを活用して発電をした経緯があるが、発電施設が老朽化したためRDFの処  
理を外部に委託するようになった。有効活用したいが、ダイオキシンなど公害の発生  
が問題となるため、アメニティパークでの一括処理としていた。

小池 RDFの処理には1トンあたり約2万円の経費がかかっている。当時はダイオキシ  
ン問題などもあったが、現在は二次燃焼施設がついていればボイラーでRDFを活用  
することができる。

鈴木 それができるとすれば、木材も混ぜて活用できるのではないか。

小池 RDFにはプラスチックが含まれたり含水率が低かったりするので、木材よりも発  
生する熱量が高い。木材を混ぜることでカロリーが落ちる心配がある。RDFをボイ  
ラーとして活用する施設も出てきているので、実績を注視していく必要がある。灰の  
処理経費の心配もあるが、現在のRDFの処理経費よりは節約できると思う。

鈴木 RDFにしても木材にしても熱量に変換して活用したい。経費だけを考えれば化石  
燃料の方が安価かもしれないが、費用対効果だけで結論をだしてよいのか。新しい産  
業を作る視点も含めて、活用などを検討すべきではないか。

平松 費用対効果も短期的なマイナスは問題ないが、どこまで生産量を増やせばマイナス  
を解消できるかを計算しなければならない。

宮崎 商工会や有識者等で、平成24年度に木材活用のビジネスモデルを研究したことが

ある。まずは、荒れている雑木林や竹林のイメージを改善したり、鳥獣害を防いだりするためにも里山整備を行う。整備して搬出された木材をチップにし、ボイラーで燃焼してエネルギーに変換する。まずは公共施設から取り組み、木材が増えてくれば、ボイラーの設置を推進する。そうすることで、地域内で化石燃料に代わるエネルギーが循環するというもの。損益分岐点がどうかという話になると、単純に採算を合わせることは困難であるが、今後ガソリンの価格が高騰すれば結果は変わってくる。また、里山整備が公共事業であるという発想で、行政が税金を投入して整備することはできるだろうし、エネルギーを循環させるためボイラーの整備費用を補助するなど1つの方法ではないか。

また、町内にこういったことを研究する協議会が設立され、事務局からはビジョンの柱の1つとして検討していただきたいとの話をいただいている。

平松 策定したビジョンを実現するためにも、そういう方はどんどん巻き込んでいきたい。

河合 きのご園では、ボイラーを設置して燃料として木材を活用することはできるか。また、それによって経費が抑えられればどうか。

金子 燃料として灯油を使っているが、価格の高騰に焦っている。木材で間に合えば良いし、経費が抑えられれば競争力が出てくると思う。

小林 旅館等の話も聞いているが、どこの企業も一番の経費は光熱費である。

持谷 全てを賄えなくても、一部だけでも活用できれば違う。

平松 いきなり全町にではなくても、どこかをモデルカンパニーとして成功事例をつくれればよい。森林整備には経費がかかるかもしれないが、結果として観光地としての魅力が高まり、鳥獣被害も減少するわけであるから、それなりの効果があればよいということになる。

津久井 知人に竹を使った商品を製造する人がいるが、木材を活用した商品を開発することはできないか。

宮崎 先ほど紹介した研究結果にも、アロマ商品の開発なども提示されているし、すでに活用している方もいる。

小池 これまでいろいろな事業に携わってきたが、このサイクルはどこかの段階に行政が関与しないと循環しないと感じている。

また、灯油1リットルと同等の熱量を得るためにはペレット2キログラムが必要であり、灯油の価格が約100円/リットルである現時点で、費用対熱量が同水準。ただし、ペレットはものによって品質に大きな隔りがある。

平松 結果として里山が整備されるわけであるから、そこは大きな問題ではない。どれだけの人件費をかければ、どれだけの森林を整備できる（どれだけの効果を得られる）か想定できる。

小池 RDFにしても木材にしても熱エネルギーへの変換が一番現実的である。発電に活

用するためには、ある程度の規模が必要となるし、小規模では国の補助も受けることができない。また、間伐材をそのままペレットなどに加工して燃料とすると経費が多くなってしまうため、例えば町内の旅館等で使用する割りばしに加工するなど、間伐材を有効活用する方法も検討した方が、燃料として活用できる可能性が高まるのではないか。

小林 持続可能なサイクルとするためには、短期的には町が投資するにしても、長期的には独自に成り立つ仕組みを作り上げていかないと継続は難しい。

河合 利根沼田の森林組合で間伐もしているが、製材によって発生する端材よりも、山に捨ててくる木の方がよっぽど多い。とにかく木材の量が必要となる。

平松 エネルギーや里山整備だけで経済合理性を考えていたら成り立たないが、里山整備や化石燃料の代替エネルギーの活用、獣害対策などに要する経費と、そこから得られる観光地としての魅力の向上などのメリットをトータルで考えると成立させることができるのではないか。

河合 森林を整備して搬出された木材を燃料として使ってください、というところまでは税金を投入してできると思う。

平松 しかし、実際に木材を燃料として活用するようになったら、安定して供給できる必要がある。里山を整備することで経済効果が生まれるサイクルを、机上の空論ではなく考え出せばよい。

鈴木 必ず費用対効果の話になるが、事業を行うことで雇用も生まれる。一定期間は行政が後押ししなければならないのではないか。それがうまくいけば、森林が宝の山になる。

小池 若者世代のほとんどは、自分の家の山がどこにあるのか把握していない状況であり、あと10年もすれば里山の管理ができなくなってしまう。やるなら今しかない。

持谷 利根川源流森林整備隊には、都会の若い方がボランティアとして多く参加してくれているようなので、そういった方々に協力いただくことはできないか。

平松 観光の商品としてフットパスを整備すれば、森林整備隊やみなかみレンジャーによってしっかり管理しないとまらない。

小池 現在の森林整備隊は下草刈りがメインとなっているし、間伐した木材も必要最低限でしか搬出していない。このようなサイクルが成り立たせるのであれば、技術も重機も必要となるし、町の大部分を国有林が占めているため、巻き込んでいく必要がある。

平松 このサイクルにデメリットがあるとすれば経費がかかることくらいで、結局は経済の問題であるから、里山整備や代替エネルギーの導入の経費に対して、観光や獣害対策、防災などで得られる効果が金額にしてどのくらいになるのかである。RDFの活用についてはどうか。

宮崎 アメニティパーク（一般廃棄物処理施設）の老朽化が進んでいるうえに、処理施設の広域化が進められており、10年後にRDFを安定して供給できるかは不明確。

■ エコ型農業と6次産業化について

金子 なぜオリーブなのか。

宮崎 耕作放棄地対策として、作業の手間もかからず設備投資が少なくて済むオリーブを実験的に栽培することとした。また、観光地としての人寄せにも期待できる。

本多 収穫時期がリンゴと重なって、人手が不足することが問題。良質のバージンオイルが搾取できるようになれば、経営としても成り立つのではないか。

平松 オリーブの加工施設に先駆けて、フルーツや野菜の加工施設（ジュースやドライフルーツなど）を導入することを提案してはどうか。

小林 ハラルフード（イスラム教の律法にのっとった食べ物）の加工施設を誘致するのはどうか。イスラム教徒が旅行で一番困るのは食べ物であって、町内の宿泊施設での利用のほか、東日本の観光地の市場に卸せるのではないか。今から始めれば一番になれる可能性がある。

持谷 旅館でも食べ物や掲示物にまで気を使わなければならない。

平松 ハラルフードも加工できるような施設を整備して、町内の宿泊施設だけでなく町外や海外にも輸出することも考えられる。しかし、野菜や果物が本町の強みであるので、それがどのように結びつけられるのか。遺伝子組み換え作物や動物性油を使用していない、ということであればいけるかもしれない。

○ ハラルフードをホームページ等により確認

・イスラム教の律法にのっとった食べ物で、ミルクや魚、野菜や穀類のほか、イスラム教の作法に従って処理された牛肉や鶏肉などが当たる。それ以外の方法で処理された肉や、豚肉、アルコールは禁じられている。禁忌物を含むうまみ調味料や、みりんなども口にできない。ハラルフードを提供する店舗や加工食品にはハラルマークが表示されている。

平松 温泉水を活用したハウス農業ができないか。

小野 寒い地域であるので、温泉をハウスまで輸送する間の温度低下が心配である。

宮崎 温泉を活用しているのではないが、新潟県村上市の瀬波温泉では下水道汚泥や食品残渣の発酵処理で発生した温熱を活用して、温室ハウスで南国フルーツを栽培している。温度が高い温泉を利用すれば、できないこともないのではないか。

小林 この施設の当初の目的は肥料を作ることであって、二次的に温熱を利用するようになった。また、すべてを民間資本でやっており、採算が取れているようである。

小野 瀬波温泉の例は、不凍液を循環させているようであるが、町で温泉を活用してやる場合、温泉そのものを循環させると温泉成分により管が腐食してしまうのではないか。

小林 温泉を活用する場合、そのものを循環させるのではなく、熱だけを活用すべき。

宮崎 温泉の量さえ確保できれば、かけ流しにするのが施設のにも最も簡易である。

鈴木 温泉を活用するにしても、源泉を確保できるかどうかが一番の問題であって、猿ヶ京温泉には町有の源泉があり量も豊富であるが、他にはないのではないか。源泉さえ確保できれば、数キロメートルでも温度を下げずに配湯できる。

宮崎 これまでもいろいろと検討してきたが、今の段階では農業として成り立たせることは非常に困難であり、観光地としての魅力を高めるくらいにしかない。しかし、町と連携する民間企業が、温泉ハウスによる食物の栽培を企画しているなど、可能性はあると思う。

平松 猿ヶ京温泉などにテストプラントを設置して、とにかく実験してみればよい。

#### ■ 日本一のエコの町について

平松 エコカーの普及率や太陽光発電の普及率の他に、エコに関して町が日本一をめざせるものはないか。

小池 エコカーに関して、国土交通省で超小型モビリティの導入を促進している。超小型モビリティは、二人乗り程度のコンパクトな自動車で、公道の走行は認められていないが、国土交通省が一部の保安基準の緩和を認定することで、公道走行が可能となる。

平松 小型モビリティについては小池さん、瀬波温泉については宮崎さん、農業の加工施設で何ができるかについては本多さんに詳細を調べていただきたい。また、出荷から漏れた果物や不合格な野菜を活用した新商品の開発もやっていきたい。

持谷 旅館では素材としてそういった食材を活用したいが、農家との接点がない。

金子 町内の観光と農業が連携できていないことがすごく問題だと感じている。ただし、農家は不合格なものを作ろうとはしていないので、それを安定供給することはできないし、特に飲食店では季節や日によって、需要の差が激しいので難しいところはある。

平松 これこそが地産地消の観光農業ではないか。不合格品の基準は、市場や生産者が決めたのではなく、出荷する側が決めたものであるから、消費者や生産者のニーズに適合していない。

### 3 次回委員会の開催について

○ 次回の委員会について、次のとおり日時と場所が決まる。

日時：4月25日（金） 午後2時30分から

場所：観光センター 2階 第1会議室

### 4 閉会